

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Factors that contribute to loss to follow-up in the medium term after initiation of anti-vascular endothelial growth factor therapy for neovascular age-related macular degeneration in Japanese patients

(日本人の滲出型加齢黄斑変性に対する抗 VEGF 治療開始後、中期的な受診中断に寄与する要因)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 高次神経制御系

眼科学 (指導教授 五味 文)

氏 名

杉澤 孝彰

滲出型加齢黄斑変性 (neovascular age-related macular degeneration : nAMD) は高齢者の視機能を著しく障害する疾患であり、抗 VEGF 療法の導入により視力予後は改善したが、治療継続には定期通院と反復注射が必要である。そのため通院中断 (loss to follow-up : LTFU) は視力低下や不可逆的視機能障害につながる重要な臨床課題である。本研究は、日本における nAMD 患者を対象に、抗 VEGF 治療開始後の早期から中期における LTFU 率を明らかにし、治療開始後の時期ごとに LTFU に関連する因子を同定することを目的とした。

全国 16 施設からなる日本臨床網膜研究グループ (J-CREST) において、2017 年から 2020 年に抗 VEGF 治療を開始した nAMD 患者 2389 例を対象とする多施設後ろ向き研究を行った。LTFU を「予定受診日から 1 か月以上受診が途絶えた、または地域医療機関へフォローが移行した場合」と定義し、治療開始後 3 か月以内、3 か月から 1 年、1 年から 2 年の 3 期間に分けて解析した。年齢、性別、既治療歴、視力、中心網膜厚、治療法、COVID-19 流行との重複などを用いて、多変量ロジスティック回帰分析を行った。

LTFU 率は治療開始後 3 か月以内で 6.8%、3 か月から 1 年で 13.8%、1 年から 2 年で 21.2% と、時間経過とともに増加した。治療開始後 3 か月以内の LTFU には初診時中心網膜厚の増大および既治療歴が関連し、3 か月から 1 年では初診時視力不良、光線力学療法併用、COVID-19 流行期との重複が有意な因子であった。1 年から 2 年の LTFU には、治療開始 3 か月時点での視力不良が最も強く関連していた。高齢者では全期間を通じて LTFU リスクが高かった一方、60 歳未満では治療開始後早期に LTFU が多い傾向が認められた。

本研究により、LTFU に関連する因子は治療開始後の時期によって異なり、特に初期治療反応を反映する早期視力成績が中期以降の治療継続に重要であることが示された。これらの結果は、LTFU 高リスク患者の早期同定と、時期に応じたフォローアップ戦略の構築に有用な知見を提供するものである。